あの日のこと

G. ヴェーンカタラーマン教授

プラシャーンティニラヤムから愛をこめてご挨拶申し上げます。本日は、シュリ・サティヤ・サイ・アーラーダナの日です。私は、どうしても 4 年前のあの同じ日を思い出してしまいます。皆さん方の多くも、おそらくそうであるに違いありません。

2011 年 4 月の衝撃的な記憶

2011 年 4 月 24 日、午前 7 時 30 分ごろのことでした。私はサイ病院にいる親しい友人から電話を受けました。その友人は取り乱した声で、「スワミのご容態はかなり重い、かなり重い」とささやき続けて電話を切りました。率直に申し上げて、これは私が予期していた知らせではありませんでした。それには理由があるので、手短に思い出しましょう。しかし、その朝の出来事について話しますと、私は再び 7 時 50 分ごろに病院から電話を受け取りました。今回電話してきたギリ氏は、厳かな声で言いました。「サイ ラム、先生。残念ですが、われわれの最愛のスワミは先ほどご逝去されました。チャクラヴァルティ氏が隣に立っていて、何か先生に言いたいそうです」

次の瞬間、チャクラヴァルティ氏が電話に出て、言いました。「ドク（博士）、——彼はいつも私を『ドク』と呼ぶのですが——ドク、死亡記事を用意してください。」 私はどういう形で用意すれば良いか尋ねました。チャクラヴァティ氏はそんな質問を想定していなかったようなので、切り込んで尋ねました。「たとえば、『ロンドンタイムス』に掲載される死亡記事のようなものが良いのですか？

「はい」とチャクラヴァルティ氏は答え、言い添えました。「300 字くらいが良いでしょう。マスコミに公表したいと思います。」 私は直ちに仕事に取りかかりました。身体は機械のように働きましたが、心はどこか他の場所にありました。たった今起こったことすべてが夢であったような振りをしながら、とにかく、ある意味でどんな痛みも麻痺していたのでした。

必然的に、私の心は昨晩の出来事を思い起こしました。日課として、パンディト教授と私は、サファヤ医師のオフィスへ直行しました。ご存知ない方のために申し上げますが、ヴィシュワナータ・パンディト教授は卓越した経済学者で、1985 年からスワミの学校で教えられ、またサイ大学第 8 代副学長としても奉仕なさいました。話を戻しますが、サファヤ医師は、1991 年 11 月 22 日にサイ病院〔高度専門病院〕が開設される前から、院長の職にありました。パンディト教授のように、サファヤ医師もカシミールの出身で、二人は古くからの友人でした。私たちが行った時、サファヤ医師はマスコミに公表する日課の医療速報をまとめている最中でした。毎日、私たちが帰る前に、サファヤ医師は必ずその日のスワミに関する医療速報のコピーをくれました。ラジオサイで使用していたのです。その間、話はいつもその特殊な時期のスワミのご健康とご容態に関することでした。

スワミが入院なさって 2 日後くらいだったと思いますが、心臓のポンプ機能を助けるバルーンポンプと呼ばれるものを挿入しなければならなくなりました。その日の午後 7 時頃でした。1時間ほど前に、その特別な仕事のためバンガロールからヘリコプターで飛んできた 2 名の医師が、無事に仕事を終えて帰りました。サファヤ医師のおかげで、パンディト教授と私はスワミを垣間見ることができました。スワミは、スワミのために作られた特別なICU（集中治療室）の可動式ベッドの上に運び入れられていました。サファヤ医師は、スワミと医師たちと共に中に入り、パンディト教授と私は、私たちのような者のために置かれた外の椅子に座っていました。

それから、私はサファヤ医師に言いました。「ドクターサーブ、 ある有力な委員会が、医療機器計画に関してあなたや病院の科学者たちと話し合うため、この病院を訪問する予定であるのを覚えておられますか？訪問の予定日は4月6日で、もう間近です。 スワミが入院なさったのですから、当分のあいだ、委員会には訪問の延期をお願いしてはどうでしょうか？」 サファヤ医師は自信ありげに答えました。「ご心配いりません。スワミはお元気になられるでしょうし、委員会の昼食会では私が接待しましょう」

悲しいことに、スワミのご健康は回復しなかったため、そうなりませんでした。お身体は多臓器不全のためにゆっくりと衰弱していったのです。入院後15日ほどして、サファヤ医師のオフィスにいた時、もちろんパンディト教授もご一緒でしたが、私はこう尋ねました。「ドクターサーブ、この多臓器不全というのは、何日間くらい持ちこたえるのですか？」 サファヤ医師が答える前に、部屋にいた誰かが口を挟みました。「私はたまたま多臓器不全について知っているので、その質問にお答えしましょう。義理の娘が多臓器不全になりましたが、ちょうど5日間でした。」その時、私は言いました。「スワミは私たちをテストしようとして、故意になさっているように思われます。最後には、必ず元気を回復され、私たち皆をびっくり仰天させられるでしょう！」

私はマハーサマーディの前夜、つまり2011年4月23日の夜に戻りたくて、この全体の話をしているのです。院長室に入ってすぐ、私たちはいつもの質問をしました。「スワミはいかがですか？」

サファヤ医師は答えました。「あのね、今朝、興味深いことが起こったのですよ。いつものように私はICUのスワミを訪ねました。スワミのお世話係の青年や医師たちと話をして、それから回診に行きました。**午後1時ごろ院長室に戻り、昼食を取るため家へ帰る準備をしようとしていました。その時、至急ICUへ来るようにとの電話を受け取ったのです。私は怖くなり、ICUへ駆けつけました。何があったと思いますか？スワミはすっかり目覚めておられ、言葉をささやかれたのです。私を見て、私を認め、うなずかれました。私はとても幸せでした」**

これを聞いた時、私も幸せに思い、返答しました。「いいですか、スワミは私たち全員を極度の不安に投げ込んで、数日後に元気を回復なさるでしょう。スワミは私たちを真っすぐ見て、からかってお尋ねになるでしょう。『あなた方全員をきちんと正すことなく、私が去ってしまうとでも思っていたのですか？』とね。」

私は心から自分の言葉を信じていました。というのは、あらゆる世俗的な兆候にもかかわらず、スワミが私たちを残して逝かれるという考えは受け入れ難かったからです。「いまいましい兆候め！」と、私は心の中で言い続けていました。「スワミは何だってできる。昼を夜に変えることも、夜を昼に変えることもできる。」等々。そうして４月２４日の朝、ギリ氏からの電話があったのです。正直に申し上げて、それは私には受け入れる覚悟のできていない電話でした。過去数日間の医療速報はそのように（危篤を）指摘してはいたのですが。

その後の3日間、どうやって過ごしていたかよく覚えていません。しかし、2つのことだけはしっかりと覚えています。一つは、ラジオサイが突然、その歴史上、最大のマスコミの仕事を抱え込んだことです。言うまでもなく、前日まで多くの否定的な宣伝活動を取り上げて、チャンスを逃さない

という観点からスワミの入院の話を主に報道していた外部のマスコミにとって、突然プッタパルティは、今や最新ニュースに関する世界の中心地となってしまったのです。

どこもかしこもOB（屋外放送）の小型トラックだらけでした。州が準備した共用カメラはサイクルワントホールの中に設置されなければなりませんでした。そして、私たちは帰依者とVIP（要人）の両方が列をなし、遺体の前を通り過ぎている時に、それらのカメラから全世界に向けて、ライブ映像を送らなければならなかったのです。人々はあらゆるところから来ていました。VVIP（超重要人

物）、VIP（要人）、その上、一般大衆も来ていたのです。町は混雑しており、私たちの学生の何人かが歴史のために、これらの出来事を取材に行きました。特に、外部のマスコミがスワミのために来た人々を困らせることがほとんどなかったからです。

お話ししているように、これらの光景はすべて、ぼやけた点のように心の目を通り過ぎて行きます。しかし、一つ確実なことがあります。私たちは皆、忙しくしていても、心の奥には重苦しいハートがありました。仕事を続けなければならなかったため、表現できませんでしたが、ハートは個人的な悲嘆の海に沈んでいたのです。

最後の朝がやってきました。つまり、ご遺体がこの世に留まる最後の時が来たのでした。行事はおのずと進行し、強い国家的な趣と、多宗教に対応した趣も加え、分刻みのプログラムは容赦なくその速度を維持していました。私はボーッとした状態で座ったまま、そのすべてを見ていました。私の一面は、常に現実の問題を油断なく警戒していましたが、 もう一方の面は、スワミと私だけで別の世界に引きこもり、心の奥で肉体のスワミを失ったという深い痛みを感じていたのです。

ホールにいた多くの人々や世界中の人々も、きっとそうだったに違いないと思います。何度もくり返し湧き上がってきた疑問は、「どうすれば、スワミとの身体的つながりのこの強力で強制的な終焉に耐えることができるだろう？　何か問題があれば、私たちはいつでもスワミの元へ行くことができたのに。」というものでした。私が喪失感に立ち向かっていた時でさえ、誰かが耳元でささやいて、私を現実に引き戻しました。「彼らは聖書を探しているようだな。聖書は一体どこで手に入るか知っているかね？」 一瞬、私はギクリとして、しかしすぐ自分を持ち直して答えました。「私のオフィスの本棚に一冊あるよ。そこで聖書のコピーを見つけることができる。」 それから、私の現実的な自己がすぐに付け加えました。「使ってもいいけれど、きちんと本棚に戻すのを忘れるなよ！」

とうとう、スワミの肉体のお身体（遺体）を穴の中に安置する時が来ました。VVIPから始まり、ご遺体にヴィブーティを振りかけるため、人々が穴の近くへ案内されました。親切な方々が私も案内して下さいました。ヴィブーティを振りかけていた時、私の心はこう言いました。**「スワミが何度おまえにヴィブーティを下さったかを覚えているか？　今、おまえはたった一度だけ、スワミにヴィブーティを捧げているのだ！この瞬間を忘れず、これがおまえにとって何を意味しているかをじっくり考えるのだ！」**

正午近くになっており、人々は帰り始めていました。私たちが帰ろうとしていると、毎日のプログラムは普段のスケジュール通りで、夕方のヴェーダ吟唱とバジャン歌唱が行われるというアナウンスがありました。

夕方になり、群衆は大幅に減りました。通常の人たちだけがいて、皆、従来どおりの席に着くこと、4月24日から即座に中断されていた特権を要求しました。スワミが肉体のダルシャンをお授けになっていた頃、私はベランダに座るのを避けていました。慣習の儀礼では最前列の最上席に座る資格があったのですが、VIP（要人）たちが「席」を強引に要求して殺到してきたからです。私は争いごとの当事者になり、毎日自分の席を要求しなければならないのがとても嫌で、昔の場所、つまりマンディールの正面玄関に近い、上部のベランダに座る方を好んでいました。昔の場所に座るのを好んでいる一握りの人間たちがいたのです。チャクラヴァルティ氏もその一人でした。

スワミがサマディーダルシャンをお始めになった、このいわゆる通常に戻った日、私はベランダへ降りて、スワミがいつもお座りになり、そこからお話しになっていた場所に山積みされたたくさんの花を見て、心が痛みました。あまりにも多くの思い出がよみがえって来ました。息が詰まり、涙があふれて流れ落ちました。ヴェーダ吟唱とバジャンの間、座るためにいつもの場所に戻りました。これはしばらくの間続きましたが、ある日、サマーディ〔霊廟〕の建設のために、ベランダ区域全体が閉鎖されることになりました。

2011年のグルプールニマーの日、現在のサマーディが一般公開され、スワミが肉体をもって下部のベランダに座っていらした頃の日課と特別な習慣が、再び元の形式に戻りました。マハー

サマーディ以後の時代には若干の変化がありました。その必要があったのでしょうが、見ればおわかりの通り、他のものは変化していません。

移行に対応するという至難の任務

では、「有形後の時代」は、どのくらい容易なものであり、またどのくらい辛いものだったでしょうか？ 言い換えれば、プラシャーンティ ニラヤム（セントラル・トラストの意）は、あの時から旗を掲げ続けるために、どのようにして転換を図り、何がなされてきたと言えるでしょうか？思い起こすために、この主題に関する二、三の言葉が必要なように思われます。

まず第一に、私たちは皆、スワミが恐ろしい不安を与え、私たちを残して逝ってしまわれるのを止めてくださるように望み、祈りました。しかし、それは起こりませんでした。スワミご自身が何度も言明なさいました。**「神は、いつどこで化身するかについて、誰にも相談しません。それに、だれを両親に選ぶかや化身する時期についても、広く知らせることはしません。」**

スワミはまた、いつカーテンを降ろすかについても、同様の自由がご自身にあることをはっきりと示されていました。それはそれとして、スワミの離脱〔ご逝去〕が予期せぬことでなかったのは明らかです。 ますます悪い兆候を示していた毎日の速報から、最期の時が近づいているのは明白でした。しかし、実際に離脱が起こると、大きな衝撃が広がりました。というのは、今や私たちの誰一人として、スワミにアドバイスを求めて走ることができないとわかったからです。さらに、マハーサマーディは夜通し、次の数日間、全世界がプッタパルティに、プラシャーンティニラヤムに、注目することを意味していました。人々が何と言おうとも、実際にそのようになったのです。マハーサマーディの行事を振り返ると、大群衆に対処し、秩序を保つこと自体が膨大な任務でした。それからマスコミ、ふたを開ければ、世界中のメディアがそこにいました。それに加えて、あらゆる分野からの VIP〔要人〕や VVIP〔超重要人物〕や首相ご本人が突然、姿を現されました。スムーズに事が進んだのはスワミの恩寵にほかなりません。 ご存知でしょうか？当時、マンモハン・シン首相とソニア・ガンディー女史が敬意を表して弔問に訪れた時、お二人は私たち皆と同じように地面に座られたのです。

お二人は弔問者芳名録にサインする時だけ、一瞬だけ椅子に座られました。それだけでした。

マハーサマーディの行事が終わった後、今度は地元のマスコミに、トラストのメンバーたちとの「対決」を試みる運が向く番が回って来ました。トラストのメンバーたちは実によく忍耐しました。彼らはいくつかの記者会見を開きました。学生たちがすべてを記録していたので、私は知っているのです。そして、遂にその騒音も徐々に収まりました。正確さや客観性や偏見からの自由について延々と論じる海外の新聞欄に運が向いて、ぞんざいで無作法な死亡記事を載せるものがある一方、スワミとスワミに反対する人々を等しく重視し、「公正」に振る舞おうとする記事もありました。これは、マスコミがバランスある行動をするやり方なのです。

ずっと以前、私はここプラシャーンティで、カナダのドキュメンタリー番組のあるプロデューサーと長い会話をしたことがあります。その人は、スワミに関するすばらしいドキュメンタリーを制作することに純粋な興味を抱いていました。私は彼に尋ねました。「あなたのドキュメンタリーの中では、スワミに関する否定的な見解を示す人に時間を割きますか？」 その人は答えました。「僕はそれを望んではいませんが、メディアの規約でそう義務づけられています。」 私は反論しました。「では、イエスに関する映画を作るとすればどうですか？その場合、あなたはどうしますか？」

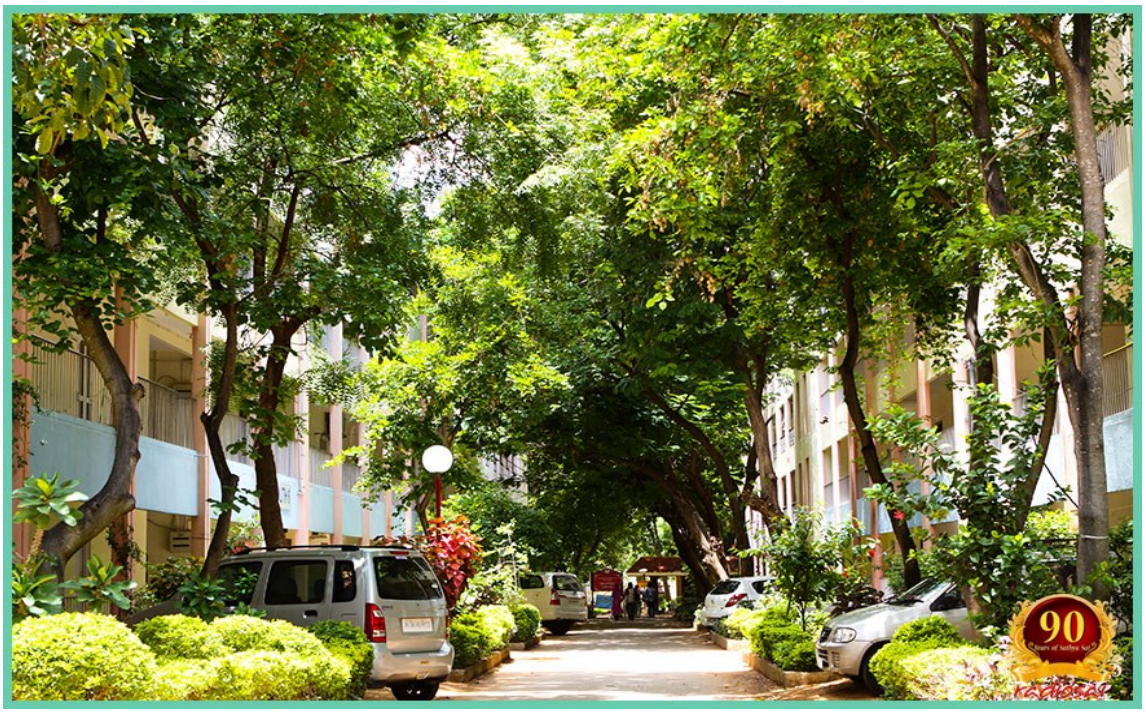
彼の答えに私は驚きました。彼はこう言ったのです。「僕は、反イエス派の人たちにも時間を与えます！それが現在の世界のやり方です。僕がコントロールできるのは割合だけです。僕の一番好きなドキュメンタリーは60％対40％の割合です。つまり、60％は肯定的な側に、40％は否定的な側に時間を割きます。」 数年後、100％スワミに反対する数多くのドキュメンタリーが制作さ

れました。それはまるで、いわゆる「理に適った公正さ」が完全な不公平さに取って代わり、まんまと罰せられずにやってのけたように思われました。

否定的な行為者たちが神の演劇の一部であることを私が理解するまでに、数年かかりました。実際、私はスワミが「否定的な行為者たちこそが、帰依者たちに神の栄光をより高く評価させることができるのです」とおっしゃったのを聞いたことがあります！マハーサマーディの時期に、多くのくだらないことが書かれ、言われるため、私はこういう話をしているのです。ありがたいことに、絶え間ない時の流れは、それ以来このすべての汚れを一掃してくれました。

トラストとアシュラム　ー　常に活気にあふれている

それに続く数年間、たまたまアシュラムの定住者でもあったトラストのメンバーたちは、三つの大きな貢献をしました。第一に、彼らは、新しいマハーサマーディ後の時代に、うまくアシュラムの機能を安定させました。第二に、いくつかの設備と利便性を改善させ始めました。たとえば道路です。完成にはほど遠いのですが、以前よりずっと状態がよくなりました。そして、たくさんの看板があります。マハーサマーディの時でさえ看板が足りませんでした。そして何よりも、アシュラムに緑が多くなりました。私は毎晩、散歩をしているので知っています。まだ為すべきことが数多く残っているのはよく承知していますが、今後、改善のペースが速まって行くのは確実です。



そして、もし私が自分たちのトランペット（ラジオサイ）を吹くならば、特にビデオの分野で、それはさしずめ一足飛びの躍進となるでしょう。突然、私たちの専門知識に対する要求が打ち上げ花火のように急上昇しました。最近の例を挙げてみると、ある日、学生たちはここサイクルワント ホールでのある催し物と、ブリンダーヴァン（ホワイトフィールドのアシュラム）で執り行われていたア

ティ ルッドラ マハー ヤグニャと、ここのスーパーホスピタルの取材を、ビデオを使って放送しなければなりませんでした。つまり、学生たちは一日に3つの行事を報道しなければならなかったのです。私たちの仕事量がどれだけ増えているかということです！

私の要点は、高まり始めた新しいテンポがあり、急速に近づいている90歳のご降誕祭によっていくぶん押し上げられているということです。私たちはウェブサイト上で刊行される手引書の準備を整えます。そこでは、ラジオサイがマハーサマーディ後の期間に行ってきたことの全詳細を伝えるだけでなく、百周年、すなわち2025年の100歳のご降誕祭に向かう10年間に行う計画もお伝えします。

永遠にスワミのメッセージを保管するための壮大な建物

ところで、アーカイブについて言及するのを忘れるところでした。10年に渡って、ラジオサイは静かにスワミとスワミの様々な旅に関する録音テープ、写真、手書きの原稿、手紙、ビデオと映画（8ミリと16ミリ）を集めてきました。実際、新しい建物は、これらすべての貴重な現物を保管するために登場します。建物の写真は役に立つ記事と共に、前に約束した手引書の一部として現れるでしょう。その記事にはプッタパルティとアシュラム一帯のサテライト（通信衛星）からの写真も含まれるでしょう。1枚は2003年に撮影されたもので、より最近のもう一枚は2012年に高解像度で撮影されたものです。この2枚を比べてみれば、10年間でアシュラムがどれほど緑化したかを見ることができます。さらなる証明がほしければ、散歩してみてください。そうすればわかります！

言いたいことはたくさんありますが、今は十分な時間がありません。皆さんの中で、今朝行われた特別な催しに気づいた方は、サイ・パンチャラタナ・キルタナの敬虔な上演の開始を見逃すことはないでしょう。この音楽の奉納は、テイヤーガラージャのアーラーダナの日を守るのと同じ精神で行われる予定です。ところで、彼のアーラーダナの日は、今年168周年が祝われました。ということは、ティヤーガラージャのアーラーダナの行事は、はるか1847年、東インド会社がインドを統治していた時代、アメリカの南北戦争が起こるまでまだ10年かそこらあり、ジェームズ・クラーク・マクスウェル〔英国の物理学者〕がまだ有名な放射線の電気磁気論を書くことになっていた頃にまでさかのぼるのです。今では、テレビ、ラジオ、そして衛星通信があることに感謝です！

私が言おうとしているのは、近い将来、常にこの国の偉大な伝統であった敬虔な音楽による神の礼拝を、ぜひ期待しているということです。それはナードパサナーとして知られており、シュリ サティヤ サイ アーラーダナの日にサイ パンチャラタナの歌唱として味わうことになるでしょう。実際、全世界中でカルナティック音楽は人気があります。もしティヤーガラージャのアーラーダナが、はるばるアメリカ合衆国のクリーブランドから、オーストラリアのメルボルンまで熱烈に祝われるのであれば、サイパンチャラタナもまた歌われないはずがないではありませんか？ 考えてもみてください！ 神の祝福がありますように。

ジェイ サイ ラム

ラジオサイチーム

出典：http://media.radiosai.org/journals/vol_13/01APR15/musings-by-g.venkataraman.htm